

綠蔭書房

佐藤広美・高橋智編

教育科學研究會綱領

教育の科學的企劃化

教育事實を的確に把握し、教育を科學的に企劃せんとする。

教育刷新の指標確立

國家の課題を達成せんが爲の國策との關聯に於て、教育刷新の根本的指標を確立せんとする。

教育研究の協同化へ

教育實踐家、専門學者及び各種職能人の協力により、又行政當局との緊密なる提携によつて、教育科學運動を展開せんとする。

地方教育文化の交流

教育の沈滞と劃一化の危險を防止し、各地方の經驗と成果とを頌ち合ふ爲に、地方教育文化の交流を圖らんとする。

教育者の數養の向上

教育者が國家的視野に立つて活動するに足るべき識見と性格とを獲得する爲の、組織と施設とを建設せんとする。

戦前の民間教育研究運動の最後の抛り所となつた教育科学研究会の機関誌『教育科学研究』と山下徳治編集の『教材と児童学研究』を復刻収録した。総力戦体制下の民間教育運動の課題、狀況を知る第一級の史料。

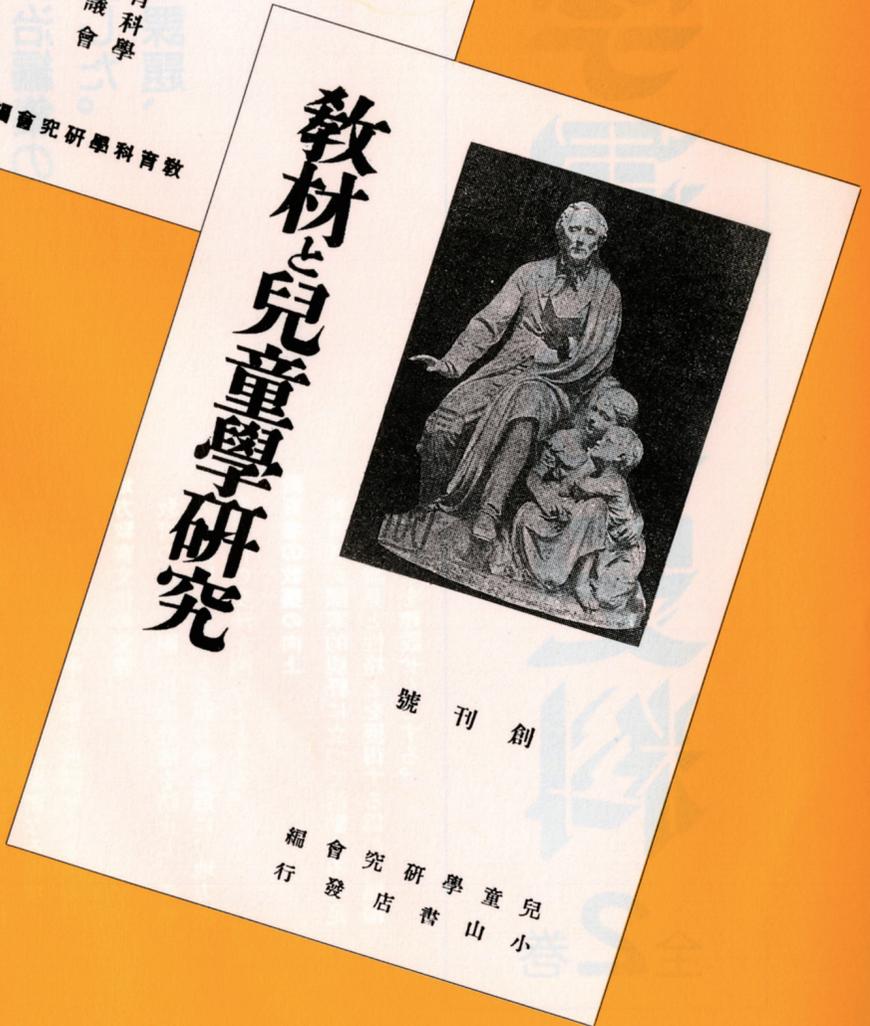
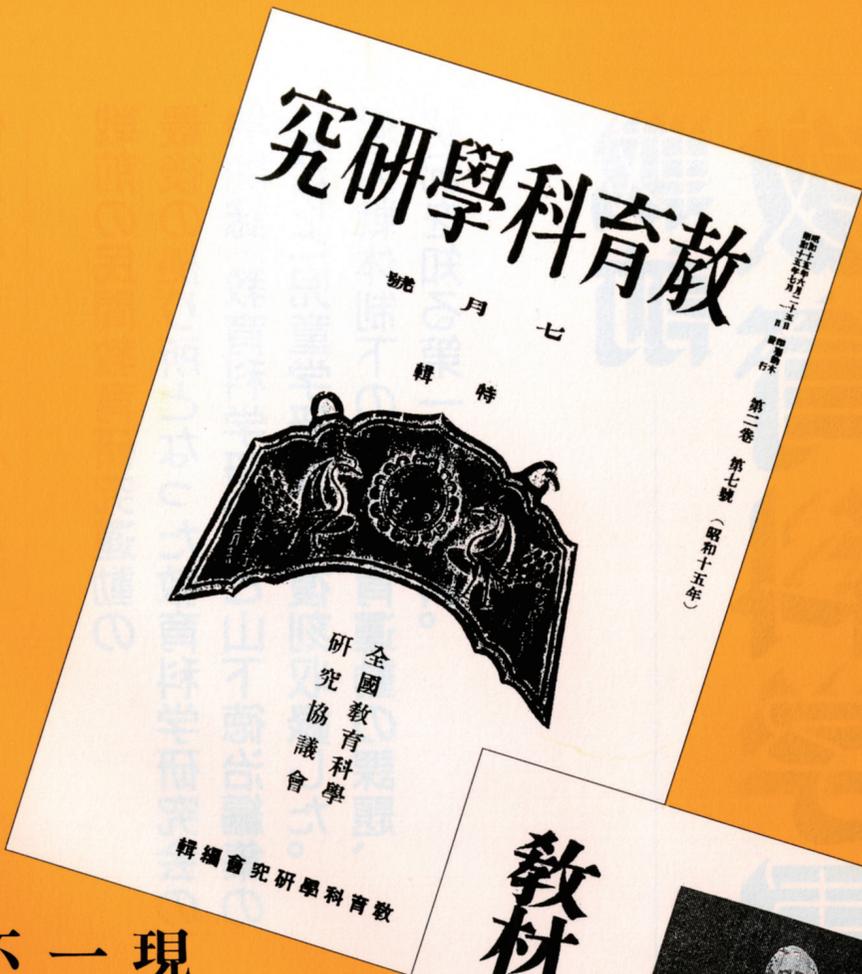
戦前

教育科學運動史料

全2卷

刊行の辞

『戦前教育科学運動史料』は、戦前の民間教育研究運動の最後の拠り所となった教育科学研究会（一九三七〜四一）の機関誌『教育科学研究』と教科研の前史をな



現代教育問題の位相を形成した
一九三〇年代を理解するための
不可欠の雑誌！

編者の言葉

『教育科学研究』について

し運動を生み出す契機ともなった山下徳治編集の『教材と児童学研究』を復刻収録したものである。すでに教科研の準機関誌『教育』や『保育問題研究』等は復刻されておき、本史料の刊行により教科研の基本史料は完結する。同時に、今年に入って教科研に関する二つの総合研究書がくしくも刊行された。民間教育史料研究会編『教育学の誕生』と佐藤広美『総力戦体制と教育学』である。いずれも『教育学研究』が研究の基本文献の一つになっている。両者が描き出したものは、研究課題や視点は異なるが、いずれも戦後五〇年間に蓄積された研究を総括的に分析し、あまり論じられてこなかった問題にも挑み、研究の空白を埋め、その上で研究課題を新たに提起する意欲的なものであり、研究者を大いに刺激するものであろう。教育学運動に関する戦後の研究領域の広さと豊富さは、今回、編者により作成された「戦前教育学運動関係研究文献目録」により改めて確認することができよう。それは戦後の教育問題を考えていく上で、戦前の教科研が提起した課題を避けることができないことを示している。実際、例えば教科研の教育改革論は、戦前の教育学の「最良の成果」と評価され、戦後教育改革の理論的土台を準備したとされる。

本史料が教育学研究の基礎文献として広く活用されることを望む次第です。

一九九七年七月

緑蔭書房



佐藤広美

〔東京家政学院大学助教授〕

『教育学研究』は、戦前教育学研究会（教科研）が発行した独自の機関誌である。すでに準機関誌として利用された『教育』は復刻されており、これで戦前の教科研運動を知る上で欠かせない史料が揃ったことになる。

「教育学研究会の五大目標」（留岡清男）「地方教研運動一年史」（北海道・東北・東海）や「満洲だより」などが掲載され、教科研本部や地方支部、さらに植民地も含めた教育学運動全体の動きを知る手がかりが得られるだろう。

編者の言葉

『教材と児童学研究』について

高橋 智

〔東京学芸大学助教授〕

『教材と児童学研究』は山下徳治が中心となって一三四年に刊行されたが、わずか四号で休刊となった。しかしプロレタリア教育運動を受け継ぎ、科学的な教材や教育技術の研究を軸に、研究と実践を結合した総合的な児童研究構想は、教育学研究運動を生み出す契機ともなった。誌面には城戸幡太郎、留岡清男、波多野完治、依田新らが登場し、そこで行われた「発育論争」「児童学論争」は、同時代の同種の国際的論争の水準に匹敵するものであった。現代教育問題の位相を形成した一九三〇年代を深く理解するためにも不可欠の雑誌である。

戦後社会を見透かす目を

豊かにする第一級史料

中内敏夫

〔中京大学教授〕

『教育科学研究』(全17冊)は、太平洋戦争にかけ四年間足らず活動して解散した(旧)教育科学研究会の機関誌である。この雑誌は、たとえば『鑑賞文選』や『綴方読本』のように膨大でなく、出版事情上むつかしいものではなかった。けれども、『生活学校』、『教育』(旧)、さらには『日本教育』など周辺にあつた大部分の雑誌のほとんどが早く復刻されたなかにあつて、なぜか、この『教育科学研究』だけは復刻されないまま今日にいたつた。

これにはいろいろの事情がからんでいる。ひとつは、一九四〇年代にかけての軍事的大政翼賛政治下に活動した教育科学研究会の政治軌跡を、戦後社会を生きた人びとがどう評価してきたかの問題である。周知のように、当事者も参加して否定、肯定の言辞がこれにむけられてきた。その評価はともあれ、この小冊子が、戦時下日本人づくりの社会過程という、自明のようであるその深部には数々の謎をだきかかえている部分を照らしだし、ひいては戦後社会を見透かす目を豊かにする第一級の史料であることにはかわりはないだろう。

『教育科学研究』創刊号より

昭和十四年九月十八日印刷
昭和十四年九月二十日發行

創刊號

教育の科學的企劃性

城戸幡太郎

教育部は科學振興のためには莫大の豫算を計上し大いに科學教育と科學政策のために力を致さんとしてゐることは新與日本の教育のために僥に悦ばしいことであるが、如何なる理由か、これまで文部省によつて計劃された教育の政策には科學的企劃性に乏しいことの多いことは甚だ遺憾に堪えないのである。

例へば國民學校法の如きもその改革の精神に於いては、われらの大いに期待するところのものがあるが、その實施については、獨り文部當局のみならず、教育實行家によつても少からず危惧の念が抱かれてゐることは事實である。それはこの案が何らの調査機關をも持たない教育審議會によつて考案された机上の計劃に過ぎないからである。しかし、それだからといつて、此の案が實施不可能であるとは必ずしも斷言できないのであつて、その當否は教育實驗の成果を俟つて始めて判斷し得るものであらう。たゞその科學的計劃の意圖なきところに問題があるのである。

更に青年學校の義務制實施に當つても、都市の青年學校の組織を如何にすべきかの問題の如き都市教育に關する科學的計畫性なくしては解決され得ないものであり、これに關聯して中等學校の改革にしても、國家に如何なる國民的義務を必要とするかの根本問題から國民の職能生活に關する教育人口と教育立地の問題とを研究調査して改革の具體案を作製しなければ問題は解決しないのである。

なほ興亞政策に於ける國語教育の問題にしても、標準日本語原本を編纂するためには、日本語の語彙並びに語法に關する科學的調査を行ふことが緊急の問題なのである。

その他、新しき教育政策の樹立に當つては科學的方法によつて解決を必要とする問題は極めて多いのである。而して、これを調査研究してゆくには教育の實際に携つてゐる教師の協力が俟つべきものが多いのであつて、文部省だけの力によつては到底なし得るものでないのである。われらは昭和八年より雑誌『教育』を通じて日本教育の科學的計畫性のために微力を盡してきたのであつたが、今や東亞の新秩序建設に當つて、われらは益々その使命の重大なることを痛感せざるを得ないのである。

VOL I

編輯會 究研學科育教

NO I

究研學科育教

『教育科学研究』第二卷第四号より

教育科學研究會の五大目標



留岡清男

凡そ運動である限り、その運動の目標を明示するところの綱領がなければならぬことは言ふまでもないが、われわれは今日まで、慎重な態度を保持して、綱領を掲げることを差控へて来た。けれども

在來のドイツの觀念的教育學が思辨的研究方法を固執したとするならば、北米合衆國の教育研究は實證的研究方法に立脚するものといつていい。

ここで注意すべきことは、北米合衆國の教育研究は、今世紀の初

先達の業績に学ぶ

山住正己

〔東京都立大学総長〕

戦後の教育科学研究会で多くを学び、また雑誌『教育』の編集など、いくつかの仕事をしてきた者として、その会の先人たちのお仕事をこなした者形で再び世に出るといふのは、大変嬉しいことです。

しかも復刻版だけでなく、戦前の研究会や関係者に関する研究文献目録など新たに編集されたものも含まれており、これはこの方々の意志を受けつぎ、遺産に学ぼうとする者にとって有難いことです。

そして編・解説を担当する佐藤広美、高橋智の両君は、私がつとめていました東京都立大学人文学部教育学研究室で助手をつとめ、いま若手気鋭の研究者であり、大学の教壇にも立っています。二人ともまことに着実に研究業績を重ねてきた人であり、今回も信頼できる仕事をしてくれるにちがいないと確信し、この史料集を推薦する次第です。

われらの企圖するところを広く輿論に懇へなければならぬと思ふ。

一、教育の科學的企圖化

凡そ學問は、學問研究の方法を確立しなければならぬが、教育研究の現状は、遺憾ながら未だ充分に教育研究方法を確立してゐるとはいへない。従来教育研究は、概ね教育理念の考究に偏向し、その結果は、教育の意見や理念を蒐集整理するに過ぎないものであつたといつていい。在來のドイツの觀念的教育學がそれであり、その影響を多分にうけて來た我國の教育學の傳統がそれである。これに對して、北米合衆國の教育研究は、教育理念の追究よりも教育事實の認識を重視し、教育理念の批判よりも教育企圖の検討を重視するのである。

られるやうになつたのは、第一次世界大戰の前後からであり、而もなほ今日これが確立の途上にあるといふことである。更にまた、ひとり北米合衆國ばかりではなしに、第一次世界大戰後の歐羅巴各國は、新しき國家体制の樹立に即應する教育制度の確立と國民練成の企圖との必要に迫られて、教育に對する考へ方を必然的に變革し、教育を理念として追究するよりも、教育を企圖として検討し遂行する傾向を著しく示すやうになつたといふことである。ナチス・ドイツでも、ファツシヨ・イタリーでも、またソヴィエト・ロシアでも、みな然りである。

これに對して、我國の教育研究はどうであるか。在來の觀念的教育學に不満を抱く消極的批判は漸く明しかけたとしても、未だ積極的に教育研究を具體的化するには至らず、言葉の上だけで教育理念

『教育科学研究』第二卷第八号より

北海道・教研運動の回顧と展望

これは、北海道の教研運動に對する私一個の側面観である。

一 北海道の教研運動は、昭和十年の八月、坂本義徳・小淵寛・小坂佐久馬・小笠原文次郎・高島幸次氏等を中心とする二十五名の若き同志を以て本道の大地に根ざす児童生活の建設を目標として結成された北海道級方教育聯盟に胚胎する。

同聯盟は、五ヶ年後の今日も健康なる成長を續け、各同人は本道教研各地支部のリーダーとして、力強い支柱となつてゐる。

其の五ヶ年間に、これ等同人は相協力して、千葉春雄・野村芳兵衛・百田宗治・城戸耀太郎・峯地光重・菅忠道・波多野完治諸氏を次々と本道に招聘し、所謂「生活級方」から「生活教育」へ、「生活教育」から「教育科學運動」へと、その熱意と意欲を展開した。殊に昨春秋の波多野完治氏の來道は、此の教研運動の結實に拍車を加へたもので、釧路・北見・旭川・函館・札幌と各地に支部の結成を見るに至つた。

こゝで本年一月、留岡清男氏の來道は、北海道聯合會の結成を促進し、本道教育の中堅人の脈起に活力を與へ、事變下物質と精神兩局面に憂患せんとする初等教育界の暗闇に清新な息吹を漲したのである。

北海道支部 森 善 次

二

教研北海道支部は、其の後宗介・楡山・北見・夕張・根室の五支部の結成によつて、現に十支部の聯合組織に伸展し、石附忠平を支部長に、約三百人の同志が北海道教育の再建を目指して精進を續けてゐる。

この結成の蔭には、北海道級方聯盟の同人の外にあつて、佐々木毅一・飯田廣太郎・松樹英代治・藤岡哲三郎・櫻井忠一・日下三誠諸氏の協力が如何に與つて力あつたかを想起せねばならぬ。

現在本支部は、過去の隔離病室的教習即教壇技術の研究といふ狭い天地から、潑刺たる國家生活人としての立場に自己を復歸すべくその過程として、多方面の社會人と接觸し、文化を吸収し、本道にあらねばならぬ教育の價値の探究に専念すると共に、此の教研運動をして、教育大業に漚潤せしめ、相共に教育革新の方途に邁進せんとする。

三

本年一月教研北海道支部結成準備會を開いてから、こゝに七ヶ月來る八月の中旬に吾々は、教研の第一回北海道地方協議會を開催し之れを機として、北海道支部の結成式を擧ぐると共に、留岡清男・平野錦美子・今野武雄・大河内一男氏等の本部人と、全道から集る支

戦前教育科学運動関係年表

- 1930・9 満州事変始まる
- 1931・10 岩波講座『教育科学』刊行
- 1934・5 『教材と児童学研究』創刊(同年8月休刊)
- 1936・9 児童学研究会結成
- ・10 保育問題研究会結成
- 1937・5 教育科学研究会結成。5研究部会をおく
- ・7 日中戦争始まる
- ・10 『保育問題研究』創刊(41・3終刊)
- 1939・8 第一回教育科学協議会開催。
- ・9 機関誌『教育科学研究』創刊
- 1940・8 第二回教育科学協議会開催
- ・10 城戸会長、留岡幹事長ら大政翼賛会に参加
- 1941・4 『教育科学研究』終刊
- ・5 教育科学研究会解散
- ・12 太平洋戦争始まる

戦前教育科学運動関係研究文献目録(第2巻の巻末に収録)

ア行	
青木紀	戦前の教科研 岩手からの証言(第2回) 教育 1986.10
感化教育事業実践と新農村建設—北海道家庭学校の小作制農場	伊ヶ崎曉生
北海道大学教育学部紀要58 1992.6	阿部重孝著作集5 教育制度論・教育財政論 解説 日本図書センター 1983
赤塚康雄	宗像誠也著作集1 解説 青木図書 1974
新制中学校成立史研究	阿部重孝著作集5 教育制度・教育財政論 解説 日本図書センター 1983
明治図書 1978	
浅岡靖央	五十嵐顕
「児童文化」概念の形成過程について—横本楠郎を中心に	教育の機会均等
明星大学教育学研究紀要2 1987	宗像誠也編『教育基本法』新評論社 1966
「児童文化」概念の史的展望序説—周郷博における「広義」の児童文化概念を中心に	教育費と社会
同上4 1989.3	『民主教育と教育学』青木書店 1978
浅野俊和	池田種生
1940年代前半保育運動における「母親指導」—戸越保育所を中心に	座談会「日本の教育運動を回顧する」②生活教育運動(新島繁・滑川道夫・国分一太郎)
名古屋大学教育学部紀要41-1『教育学科』 1994.9	カリキュラム 1949.8
同上(2)	
同上41-2 1995.3	井沢直也
「児童問題研究会」論ノート—浦辺史による「保育研究部(託児所研究部)」の活動を中心に	1930年代の職業技術教育の展開過程
名古屋大学教育学部社会教育研究年報11 1995.4	東京大学教育学部紀要22 1982
天田邦子	1930年代における職業技術教育論の構造
戦前教育科学運動における児童文化研究	教育学研究52-1 1985.3
上田女子短期大学紀要10 1987	労働者
安藤玉治	『総力戦体制と教育』東京大学出版会 1987
	石川準吉
	総合国策と教育改革案
	清水書院 1962

何冊目かの冊子に、尊敬する山下徳治先生が「科学としての教育学—教育学の根本的転向」を書かれていた。その中でこれからの教育学は歴史科学、社会科学でなければならぬと書かれているのを読んで深い感動を覚えた。折から巷間「国体明徴」「日本精神」に立つ教育学が唱導されはじめていた。それだけに『講座』や『教育』の刊行に学問的抵抗の姿勢を感じることができた。同様に戦前の「教育科学」の基本資料である、山下先生編集の『教材と児童学研究』および『教育学研究』が今回、復刻され刊行されることは誠に意義深い。活用されることを期待し、心から推薦する。

佐藤広美・高橋智編

戦前

教育科学運動史料

〈本書の構成〉

1. 『教育科学研究』 昭和14年9月↓16年4月刊(全17冊)
 - ・ 解題(佐藤広美) 総目次 著者名索引
2. 『教材と児童学研究』 昭和9年5月↓同年8月刊(全4冊)
 - ・ 解題(高橋 智) 総目次 著者名索引
 - ・ 戦前教育科学運動関係研究文献目録

〈体裁〉

A5判・上製クロス製・総960頁・ケース入り

〈定価〉

本体価格600,000円+税

ISBN4-89774-501-2 C3037 ¥32000E

〈推薦〉

海老原治善〔北京大学客座教授〕
中内 敏夫〔中京大学教授〕
波多野完治〔お茶の水女子大学名誉教授〕
山住 正己〔東京都立大学総長〕



緑蔭書房

173 東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

特約店